

## ロドス島考古学博物館と考古学図書館を訪ねて

渡航時期：平成19年3月5日～平成19年3月16日

調査地：ギリシア（アテネ、ロドス）

長尾美里

西洋史学専門 後期課程3年

### はじめに

この報告書では「モデル事業」としてはじめに、今後の派遣学生、とりわけギリシアでの資料調査を希望する学生にとって有益となる現地の情報について紹介し、その後、今回の調査で得られた資料を自分の研究にどのように活用することができるのか、その展望について報告したい。

### 渡航前の準備

今回調査に当たって、見学予定のロドスの博物館に指導教官の推薦状と共に問い合わせの手紙を渡航1ヶ月前に郵送した。手紙には、「自分が何の研究をしているのか」「現地で何をしたいのか」を簡潔に記入した。ギリシアの場合、直接遺物に触れるような本格的な学術調査は、欧米の研究機関を通じて身元証明をしてもらう必要があるため（日本の研究機関がギリシアにはないため）、込み入った作業は希望しなかった。

手紙に同封した推薦状とは別に、指導教官にもう1通別の推薦状を用意してもらった。現地ではこちらが大変役に立った。というのも、当日ロドスの考古局の事務を訪問した際、全く話が通じず、郵送した手紙がきちんと博物館側に届いて、しかるべき担当者の手へ渡っていたかどうかは極めて怪しい状態だったからである。

また、アテネには複数の欧米諸国の研究施設と図書館がある。こちらを利用するには、予めHPなどで必要な書類（証明写真や指導教官の推薦状など）を調べ、そろえておく必要がある。パスポートを提示するだけで入館を許可してくれるところもあるが、場所によっては新規訪問者の利用カードを作成する窓口が、1週間のうち数日（アメリカの研究施設では、月曜・木曜・金曜の午前中）と限られることもあるので、常に新しい情報を得て準備することをお勧めする。

ギリシアで調査をするにあたって、日本の大学の大学院生の身分は非常に弱く、そのため指導教官として

かり連絡を取り合い、きちんとした推薦状を持って渡航することが必要である。また、自分用の英文の名紙を用意していくのも、後日書類を作成してもらったり、何かを郵送してもらったりするのに役立つ。

### 現地にて

渡航した3月はギリシアではシーズンオフにあたり、空港からロドス市内に入るバスの本数は数が少なくなっていた。バス停にいた数名のギリシア人と共に



ロドスの考古学図書館

城壁の北側入り口から直進すると右手側にある。考古局（Archaeological Service）の正式な入り口は、イボトン通りに面している。



ロドス旧市街 イボトン通り  
考古局の入り口はこちら側にある。

タクシーに乗り20分するとロドス島の北端に位置するロドスシティの中心地にたどり着く。ロドスの町は中世に城壁で囲まれた旧市街と、新しいホテルや商店の立ち並ぶ新市街からできており、考古学博物館と図書館は旧市街の中にある。

## ロドス考古学図書館

考古局の建物は14世紀に騎士団が病棟として利用していたもので、中世の趣の残る施設である。ロドスに着いた翌日考古局を訪れ、自分の所属と来訪目的について述べると、先方の受付の人は、あまり要領を得ない様子であった。郵送しておいた手紙が、然るべき担当者の手には渡っていないのかもしれないという一抹の不安がここで浮かび上がり、予備で作成しておいた推薦状をこのとき提示したのである。指導教官がギリシア語で作成してくれた推薦状のおかげで（ギリシアではもちろん英語は通じるが、少し年配の人はギリシア語の方が何かと安心するようである）、私がロドスに何をしにきたのか大方理解してもらうことができ、奥の図書館に案内してもらうことができた。

生憎図書館の開館時間と同じ頃に、ロドスの考古学者たちは地元発掘調査に出発してしまっていて今回の日程の間に面会することは叶わなかったが、その代わりに考古学関連の書棚を好きなように使用することができた。

今回、こちらの図書館ではロドスの発掘報告書を中心に調査を行なった。とくにデロス島・レネア島から出土しているロドス製の bird bowl が、地元ロドスにおいてどのようなコンテキストで出土しているのかを確認するためにその出土例を中心に収集した。

かなりの量の複写を依頼したのだが、図書館の方の親切で(?) 文献複写代は無料であった。さらに、図書館で作業を行なったことを証明する文書を大学宛に作成していただいた。

## ロドス考古学博物館にて

図書館と同様、博物館もロドスの旧市街にある14世紀の建物を利用したものである。博物館の事務局もイポトン通りの考古局が受け持っているようで、ここでも予想通り手紙の受け取りを確認することはできなかった。それ故、写真撮影は観光客と同じ状態で行なった。

ロドス考古学博物館にはミケーネ時代から中世まで



ロドス考古学博物館 1階回廊



ロドス考古学博物館 中庭  
幾何学文様土器の展示は2階にある。

の様々な時代の資料が展示されている。中でも、ロドス島にかつて存在した3つのポリス、リンドス、カミロス、イアリュソスから出土した墓の埋葬品の展示が充実しており、様々な遺物を見学することができた。

デロス島から出土したロドス製の幾何学文様土器と比較するため、写真撮影は幾何学文様土器を中心に行なった。

## ロドス島出土の幾何学文様土器

ドデカネソス諸島の幾何学文様土器が出土する代表的な地域はロドス島とコス島であり、土器の多くが墓域から出土している。イオニア地方を含む東地中海という枠組みでとらえられることも多いが、イオニア地方の形式のほうが、アッティカ様式の影響が強いと指摘されている (Coldstream 1968: 264)。

幾何学文様期のロドス製土器の中でも、その装飾が特徴的なのは、小型の飲料用の器「スキュフォス」や「コテュレ」である。

いわゆる bird-kotyle は、中期幾何学文様期から出現

しはじめた器で、東地中海に広く分布していたことがわかっている。装飾部が4分割され、両サイドに格子模様が入ったひし形を配し、中央の2面にこの地方独特のモチーフと鳥の絵が加わった器は、その後各地で模倣され広まっていったと考えられている。同様の器はデロス島からも出土している。

上記のロドス出土の bird-kotyle は1927年にイタリ

アの調査隊によって、Zambico 地区の墓域から発掘されたものである。この他にオイノコエなどが一緒に副葬されていたことはわかっているが、埋葬者についての詳細はわからない。

亜幾何学文様期に入ると bird-kotyle から発展したと思われる bird-bowl という器がロドス周辺で流行する。

高さ10センチにも満たない小型のこの器は、ロド



ロドス考古学博物館所蔵  
ロドス製 bird-kotyle no.15 (750-740 BC)



デロス島出土のロドス製 bird-kotyle  
ミコノス考古学博物館所蔵 (2006年9月撮影)



ロドス製 bird-bowl  
(625-600 BC) Papatislures T14より出土



キプロス・モデル オイノコエ  
(740 BC)



ロドス製 bird-bowl  
(625-575 BC) Macri Lagoni T5より出土。複装 (2~3人)



ロドス製 bird-bowl  
(675-650 BC) Macri Langoni T143 甕棺より出土。  
コリントス製のコテュレも共に出土



ロドス製 bird-bowl  
(675-315 BC) no.18

スではカミロスやイアリュソスの墓域から出土している。出土するコンテキストは、埋葬形式に関係なくあらゆる種類の埋葬地から出土している。東地中海各地で見られる bird-bowl の生産地について、ロドス製であることが従来指摘されてきたが、中には他の地方の模倣品も含まれている。鳥の装飾に限らず、ロドスでも同様の器形は数多く副葬品として出土している。

### イアリュソスの埋葬形式の発展

古代ギリシア社会での埋葬形式は時代によって異なり、この地方、例えばイアリュソスの場合大きく3段階に分けることができる。

前10世紀後半から前8世紀半ばまでは、成人の遺

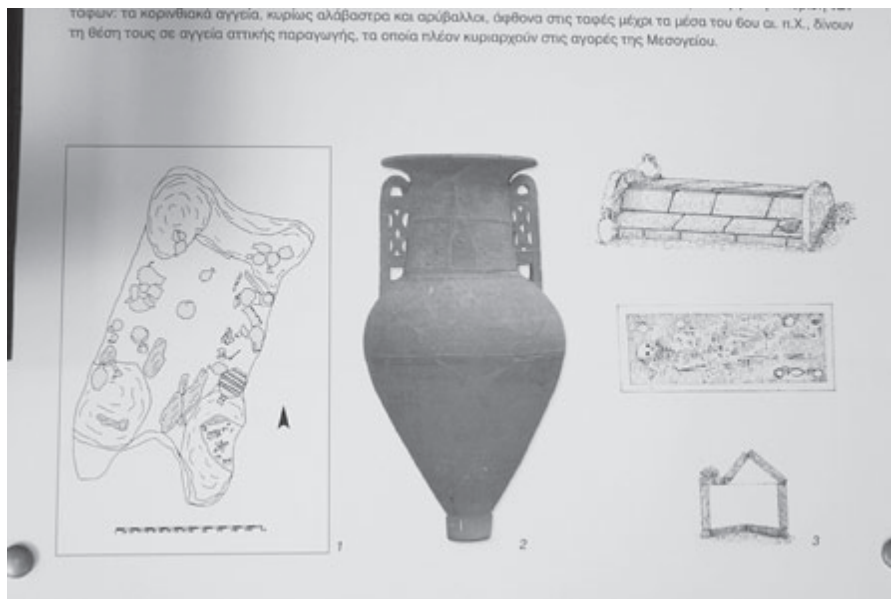


スキュフォス  
(時期不明) Papatislures T7(9) 子供用甕棺墓から出土

体は茶甌に付した後骨壺に入れて埋葬していた。一方、子供は器に入れて土葬していた。その後前8世紀半ばから前550年までは成人は火葬した後にそのまま墓に埋葬し、子供は甕棺に埋葬していた。

しかし、イアリュソスでは前550年以降火葬は行なわれず、石版で作った石室形の墓が中心となる（下記写真パネル参照のこと）。

bird-bowl は発展第1段階にあたる前700～675年、2段階の前675～650年、第3段階の前650～615年、第4段階の前615～600年と、長い期間に渡って使用された器であるため、あらゆる形式の埋葬から出土していることがロドス島内での出土状況からもうかがえる。



イアリュソスにおける埋葬形式の発展  
解説パネル@ロドス考古学博物館





ロドス製 bird-bowl  
(650-600 BC) Drakidis 火葬墓から出土



デロス島出土 bird-bowl  
ミコノス博物館所蔵 (2006年9月撮影)

### デロス島出土の bird-bowl の考察

デロス島に作られた墓は、古典期に近接するレネア島にアテナイ人によって移動されたという経緯があるため、墓の埋葬品としての原位置は保たれていない。そのため、出土した遺物を解釈する手段は極めて少ない。

今回、ロドス島での出土状況と照らし合わせてみた結果、デロス島から出土した bird-bowl は、ロドス島から副葬品として島内に入ったと考えてよいといえる。しかし、これらの土器を使用した人々（副葬品として望んだ人々）と、聖域としてのデロス島を使用し

た人々とを直接結びつけたこれまでの自分の解釈については、少し見直しが必要であると認識した。

それでも、この時代の副葬品としてロドス製の bird-bowl が東地中海および、エーゲ海の各地で一般的であったのかという点、一概にそうとはいえない。例えば、デロス島と関係の深いナクソス島の墓域からは、ロドス製の bird-bowl は現在のところ出土していない。これについては、他のエーゲ海の島の墓域について詳しく調べてみる必要があるだろう。

使用する土器の装飾や形がどの程度、使用する集団のアイデンティティに関わってくるかという問題も踏まえて、今後検討する必要がある。